

『ウガンダの森でチンパンジーを追う』に参加して

大阪府泉大津市立誠風中学校 久山尚紀

2014年8月9日から8月20日まで、ウガンダ共和国はブドンゴ森林保護区で行われた『ウガンダの森でチンパンジーを追う』に参加した。プロジェクトの内容は、保護区内の植生調査・周辺住民への聴き取り・サルとチンパンジーの行動観察である。帰国後、現地で学び、得た経験を学校でいかに還元したかについて報告する。

プロジェクトについて

実施時期

2014年8月9日～8月20日

開催場所

ウガンダ共和国 ブドンゴ (Budongo) 森林保護区

目的

保護区内の樹木の結実がここ15年で15%以上低下しており、このため森林で十分な餌を採ることが出来なくなった霊長類は、近くの農作物を荒らし、住民との衝突が起きている。この森林での変化の原因と結果、掠奪との関係性について継続的な調査データを集積することを目的とする。

内容

植生調査

サル・チンパンジーは雑食性であり、食料にもなり得る樹木の調査を行った。保護区は調査区域が基盤目状に分けられている(図1)。そして、調査区域内の対象樹には種名の略称と番号が印付けられている(図2)。ガイド1

人を含む3人1組で当該区域内の樹木について双眼鏡を用い、樹冠付近の枝葉を観察・記録した。済めば別の区域に移動し、同様の調査を行った。調査は新芽・若葉および老葉の割合・未熟および成熟果実の個数・開花の項目についてである。1日に600本以上の記録をとった(図3)。

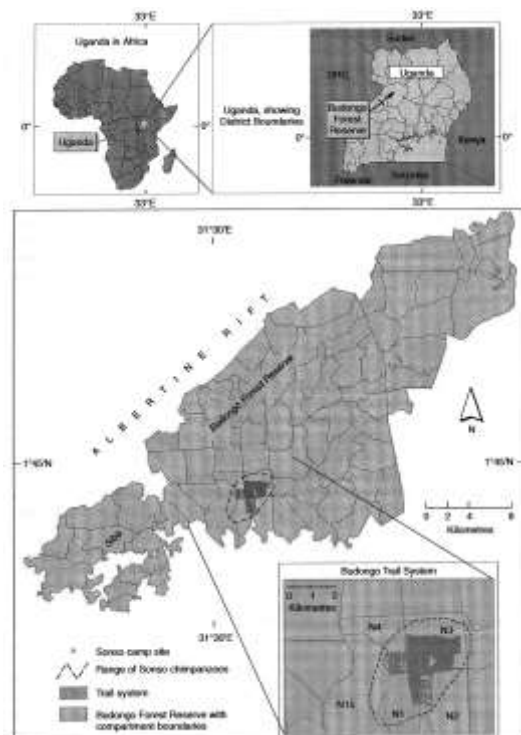


図1 ブドンゴ保護区(Reynolds 2004)

また、スタッフの一人が獣医師であり、近隣農村の家畜の消毒に付き添った(図 10)。たくさんの人なつこい児童がいて、日本で忘れ去られた、愛想の良い元気な子どもたちの姿を久しぶりに見た気がした。



図 10 近隣農村で家畜の消毒

余暇には、赤道を訪れることに加え、マチソンプォールズ国立公園(Murchison Falls National Park)にてサファリツアーを体験した。保護区内の熱帯雨林とはっきり異なる、サバンナ地帯にて多くの動物を見ることが出来た。その一部を掲載する(図 11, 図 12)。



図 11 サファリで見たスイギュウ



図 12 サファリで見たキリン

報告会について

このプロジェクトで学び、得た体験を帰国後、3年生に向けては理科の授業で9クラス分、そして1・2年生に向けては9月3日水曜日 第7校時に本校体育館にて合同学年集会にて発表を行った。各学年8クラスに教員を加えておよそ700人という大人数が集まる環境であったが、生徒たちは50分の間集中して耳を傾けていた。テーマは、国際理解・野外調査の実際・環境教育という3点に絞った。第一の国際理解については、ウガンダは砂漠のイメージが強いアフリカ大陸にあるが、緑にあふれ「アフリカの真珠」と言われていることに始まり、街の様子や通貨、宿舎に向かう道中で出合った道端の動物たちの様子を示した。第二の野外調査の実際については、前述の調査の様子や林内で見つけた動植物や菌類の写真を紹介することはもとより、宿舎(図 13)は人里離れた山の upper にあり、夕食は地元の食事が提供され

たこと(図 14)に触れ、ホテルに宿泊して冷暖房の効いた環境のもとで調査するわけではないことを強調した。尤も、毎晩の似たような夕食は大変美味であったことは付け加えておく。また、毎夜ハイラックス (hyrax) が縄張り主張のため鳴き叫ぶので、この鳴き声を流し、さらにチンパンジーを追いかける映像など、単に活動写真の羅列に終わらず、臨場感が伝わるように発表した。



図 13 宿舎遠景



図 14 夕食の典型例

第三の環境教育については、密猟の罠の写真(図 9)を提示し、動物保護と人間活動の均衡について言及した。ただし、どちらが良くてどちらが悪いとは

コメントせず、ただ獲物は転売され、密猟者の利益となるという事実のみ話した。生徒たちに自分で考えてほしいからである。講話の最後では、もし参加したいと思ったら、第一に英語、第二に体力、そして第三にやる気を養おうとまとめた(図 15)。



図 15 体育館での発表の様子

発表を聞いた生徒は、地球のほぼ裏側にあるアフリカ大陸を幾ばくか身近に感じたように思う。学年集会で感想を求めることはしなかったが、後ほど質問に来たり、廊下で会話をしたりと反響があった。また、所属する3年生には感想文を書かせた。以下に一部を抜粋する。「チンパンジーは意外と素早かったので、少し驚いた。鳴き声を聞いたのは初めてだった。」「ウガンダは自然が豊富なので行ってみたいと思った。自然の中で動物と触れ合ってみたい。」と生物多様性や自然に対する興味・関心が湧いた生徒や、「チンパンジーは、数がだんだん減ってきているので、もっと動物を大切にしなければと思った。」と自然・動物保護に目を向ける生徒、「ヒヒも生きるため

に盗み食いをするので、それを考えると、ヒヒを悪者にすることは複雑に感じた。」と環境問題を考える上で欠かすことのできない共存共栄の精神が感じられるものや、「英語をもっと勉強して、海外で生活したいと思った。」と海外留学や海外生活に思いを馳せる生徒、そして「ウガンダで日本人が尊敬されていると知って誇らしくなった。」と自尊感情の向上を思わせる生徒もいた。

このほか、具体的な授業に使えることとしては、本プロジェクトの調査方法を学校内の動植物に当てはめて調査することが出来るかもしれない。ただし、環境問題を考えるにはとても長い期間が必要で、得られるデータから即時的に考察することは無理に近いだらう。とはいえ、お試しとして科学者の卵になったつもりで中学3年の最終章や夏休みなど長期休暇の自主課題研究として行わせるにはよい教材かもしれない。そこから本当に、科学者になる子どもたちが出てくることを期待しながら。

このように、本プロジェクトが学校教育に与える意味というのは、子どもたちがただ教科横断的な知識を取得するだけでなく、それぞれの個性に応じた興味・関心を高められる効果もあったと感じている。それは講話を聞くだけでなく、実際に調査を体験させてみれば教育効果が大きく見込めるだろ

う。また、副次的に、同様の調査活動を行うことで、生活様式の全く異なる他者を知り自身と比較できることは、小中学校という発達段階の時期に、他人への思いやりや国際理解の精神の礎となることが想像される。そのためにも、将来の社会を形成する人間を養成するという使命を帯びた教員が、このような機会に対して積極的に参加し、そこで得た豊かな知見を広く子どもたち、そしてそれを見守り支えてくださる保護者・地域の人々に伝えていくことは、これからの地球環境をどうするかと考える点でも、とても意義深いことであることは間違いない。

謝辞

このような貴重な機会を提供して下さった認定特定非営利活動法人 アースウォッチ・ジャパンならびに資金援助して下さった花王株式会社の関係者の皆様に感謝いたします。また、同行の東洋英和女学院 森田正吾先生のおかげで、楽しく充実したプロジェクトを過ごせました。この文面をお借りして感謝申し上げます。

参考文献

Reynolds V, 2004, The Chimpanzees of the Budongo Forest, p.6 Oxford University Press.